

ヒマラヤ・ビスターリⅣ

(ゴーキョ・カラパタル・チュクン)

‘05年 11月



私がよく使う海外登山旅行会社の企画に“エベレスト山群展望三大ピーク登頂”という、エベレストを展望できるヒマラヤの5000mクラスの山に3ついっぺんに登ってしまおう、というのがある。今回はそれをやってきた。実に28日間の長丁場であった。東京生まれで東京育ちの私が、物心ついてから一番長く東京を離れた日々であった。

1. メンバー表

今回の山旅のツアーリーダーが、2度目のキリマンジャロのときにお世話になった島方さんであることは、事前に配られた旅行案内書でわかっていた。しかし成田空港で配られた参加者名簿を見ると、メンバー総数は16人であり、一組で行動するには多すぎるということで、8人ずつの2パーティーに分けられ、もうひとつのツアーリーダーは今年5月のペルー・アンデスでお世話になった、人気者の鈴木達夫さんである。私の配された島方グループのメンバーにはかつてのお知り合いが多いのにびっくりした。昨年アンナプルナ内院のときと一緒にあった、新聞取らない・テレビもなければ電話もない、キャッシュカードも使わない、のあの変人男の戸塚さんがいる。同じく昨年一緒にあった、元校長先生の中蒲原さんもいる。今回は61歳になる弟さんを引き連れての参加である。中蒲原兄さんも69歳になったとのことである。若々しくとてもそんな歳には見えない。さらに一昨年のヤラピークと一緒にあった新潟さんがいる。彼女も今年は66歳になったはずである。成田で声をかけると、“心強い方がいてくれて良かったです。”と反応してくれる。今回は新潟県出身者として中蒲原さん兄弟もいるので、彼女の名前は長岡さんに改名してもらおう。名古屋からの参加でタイのバンコク空港で合流する予定の、今年5月のペルー・アンデスと一緒にあった愛知さんも参加者名簿に載っている。まったくお知り合いでないのは金沢さんと名古屋から来る南さんの二人の女性だけである。タイのバンコクへ着くと、すでに到着していた名古屋・大阪・福岡組と合流する。バスに乗り込むところで愛知さんに会う。成田で名簿を見たときに、再会できることを喜んで期待していたのだが“あら、今度はどこに行くんですか？”という挨拶で始まった。向こうは気にもしていなかったようで、相変わらず可愛げがない。一方、鈴木グループにはお知り合いはいない。まるで俺のためにメンバー分けをしてくれたのではないかと思いつく。グループが違えば、行きと還りの飛行機こそ一緒であるが、あとは泊まる場所も行動もまったく別になる。

2. プロローグ

バンコクで一泊して二日目はカトマンズ、三日目にはヒマラヤの奥地ルクラ飛行場に降り立つという、例によってすぐにヒマラヤトレッキングシステムの中に組み入れられる。ひとまずエベレスト街道と呼ばれるこの地域の中心地であるナムチェバザールへ行きこを支点として、ゴーキョ・カラパタール・チュクンの3つの5000mクラスの山に対して3本指をなぞるように歩くのが、今回のトレッキングの特徴である。

ルクラ飛行場は、5年前に来たときはジャリ製の滑走路で驚かされたが、現在はコンクリート舗装されて、到着や搭乗のための建物も立派なのができている。ルクラの広場でわれわれを支援してくれるシェルパに引



図1 トレッキングルート

き合わされる。サーダー（シェルパのリーダー）はオングチョップという中年の少し腹の出た色黒のおっさんである。戸塚さんから“高橋さん、カルマがいるよ”と教えられる。なんと去年のアンナプルナ内院のときにコック長を務めたカルマが今回もコック長としてやってくれるようである。こちらも出っ張った腹を抱えてコロコロした、とてもヒマラヤの山とは似つかわしくないスタイルのおっさんであるが、私のことも覚えてくれてたようで、“やあ、やあ、またよろしく”とお互いに懐かしむ。

初日は2 800mのルクラから2 610mのパクディンまでの3時間の下りである。何もかもが初めてであった5年前とは少し違う感覚で歩く。すでにヒマラヤも4回目、この道は2回目であるのだから。若いシェルパたちが休憩時間にラジオの音楽で踊り始める。乗り易い愛知さんが呼応する。私もつられて踊りだすと、ほかにもけっこう乗り易い人がいていきなり宴会のようになった。パクディンからナムチェまではロッジに泊まった。島方さんの話しぶりではロッジのほうがテントより高級といったニュアンスであった。私はテントのほうが好きであるので、こんなところで金をかけるならば旅行費用をもう少し安くしろといたいところである。また食事今回はダイニングテントではなく、テントで寝るときもすべてロッジでとった。この場合はダイニングテントを運ぶのどちらが安上がりなのかはわからないが、メンバーのコミュニケーションをとるという意味合いからはダイニングテントのほうが私の好みである。外人さんたちが隣でガヤガヤやっているとおとなしくなってしまう。5年前よりもロッジの数は多くなったような気がするけれど、ほかのテントグループを見まわしてみるとダイニングテントを使っているパーティーもあったので、トレッキング環境が変わったということではなさそうだ。山行開始初日になるパクディンの夜も、トレッキングを終えて明日は帰るらしい外人さんのパーティー



写真1 ルクラの街からスタート



写真2 休憩時間の踊りまくり



写真3 パクディンのロッジ



写真4 ロッジでの食事

がにぎやかに踊りまくっていた。英語はまったくだめであるが物怖じしない性格の愛知さんが、外人さんの誘いに乗って一緒に踊りまくっている。みんなが引き上げてはまだやっていたようだ。明日からは3000m以上の高所になるのに元気なものだ。5月のペルーでこの人の歩き方は高所向きではないなど感じていたので、高所での心構えなどをおせっかいに話してやったら、“その後、私もバルトロ氷河の29日間のトレッキングや北アルプスで20kg背負って歩いたりしています。”と反発されてしまった。高慢ちきメ。テントやロッジの部屋も二人でひとつが標準になっているが、彼女は一人部屋希望で割増料金を払っていた。

3. トレッキングの楽しみ方

一昨年のヤラピークのときのランタン谷や今年5月のペルー・アンデスで広大なU字谷を見て、トレッキングの楽しみ方というもの、単なる山登りとか大きな山を見たり写真を撮ったりのものではなく、今そこの大自然の中に居ることを喜びとするべきである、という悟りを開いたような境地になった。雪を抱いた7000m以上の山々が当たり前のようにそびえていたって、私の技量ではそれは登る対象にはなり得ない。そうかといって写真を撮るだけで満足する心境にもならない。ここではひとまずトレッキング道にはためくタルチョ・ストゥバ（卒塔婆と同意語とか）・マニ石（お経を書いた大きな岩）・マニ車（1回転させるとお経を読んだと同じ効能があるとされる）の中にヒマラヤにきた実感に浸ることにする。最初に目に飛び込んできた白い明峰コンデ・リ（6187m）がやさしく見下ろしてくれる。ここでは白き山々が他人の顔をしていない。トレッキングルートと溶け合っている。



写真5 タルチョとストゥバ



写真6 マニ車

4. サーダーのオングチョップ

サーダーのオングチョップは元気が良い。日本語はほとんどダメで、“ゲンキ？”と“サムイ・サムイ”くらいしか話さない。サーダーになるためには英語は必須であるのでむろん話せる。しかし私が話しかける英語は聞き取れないようで、必ず聞き返される。時たま行き会う西欧人と彼が話しているときは流暢に話しているので、私のほうが悪いのであろう。私の今通っている英語

学校では elementary (小学校) クラス所属であるので、もう少しガンバラナクッチャ。彼はロッジや民家を通り過ぎるときには必ず声をかけて行く。特に女性に対してはことのほか熱心である。その顔の広さには驚かされる。ヒマラヤではサーダーというのは尊敬される立場にあるので、威厳を保ち比較的口数の少ない人が多いようであるが、彼の場合はそんなこと関係ないようである。ナムチェバザールに着くと、その日と高所順応日とされた次の日の二日間泊まったロッジは、なんとナムチェバザールのど真ん中に位置するサーダーが経営するみやげ物屋の3階であった。なかなか商売上手でもあるみたいだ。ナムチェでの高所順応日にはみやげ物屋回りをしてヤクの毛で織られたマフラーなどを買ったが、サーダーの店では買わなかった。ちょっとした抵抗よ。



写真7 マニ石の前で、サーダーたち



写真8 ナムチェバザールのみやげ物屋街

5. トレッキングの風景

ここまで来ると、もう裏山へ登るとエベレストや特徴のある山容のアマダブラムが見えるようになる。いよいよヒマラヤの奥のほうに入っていくことになり、やっと本格的にトレッキングが始まったという感じである。ナムチェより下の2000m台の部落では野菜などの畑がたくさん見られたが、ここから先では谷合のちょっとした広いところでは積み石に囲まれたカルカ(放牧場)が目立つようになる。夏になるとヤクやゾッキョ(ヤクと牛とのかけ合わせ。ヤクは暑いところは苦手であるがゾッキョは暑いところも寒いところも強い)の放牧場になるとのことである。この季節には草もないので、ヤクやゾッキョは下の部落に降ろされているということである。われわれが泊まるテントもほとんどこのカルカに設営される。



写真9 谷合のカルカ

ヒマラヤには世界中からトレkkerが集まってくる。5年前には、外人さんは一人や少人数で来るのが多く、日本人はツアー会社に引率された団体が多いと感じたが、今回の印象は少し違っ

た。外人さんにも団体はいるし、日本人でも一人で来ているのに何人か出会った。若い女の子もいたし、中年も年寄りも、いろいろいた。少し違うのは、外人さんには夫婦や家族と思える少人数グループがけっこういるのに、日本人のこういった感じの人は見かけなかった点くらいかな。小さな国旗をザックに括りつけているイングランド人もいたし、多人数の団体でおそろいのダッフルザックを持ちさらにマグカップまでそろえているのもいた。外人の女の子が一人で歩いているのに出会ったので早速声をかける。“Are you solo?”、彼女は怪訝な顔をしているので、人差し指を立ててジェスチャーで示すと、“Yes”と返事が返ってきた。あいつは英語圏の人間ではないのかな、それとも何か違っていたのかな。数日後また外人の女の子が一人で歩いているのに出会った。再び同じ質問をする。“Are you walking by solo?”、“Yes”、“Oh, you are very strong.”。その後で彼女が早口に何か言ってきたがぜんぜん聞き取れなかった。しかし会話は通用したみたいだ。英語学校に払った月謝は無駄ではなかった。ルン・ルン・ルン・ルン・ルン・ルンと。



写真 10 カルカに設営されたテント



写真 11 エベレストとアマダブラムの遠望

6. ゴーキョ・ピーク

最初のピークになるゴーキョ・ピーク (5360m) はゴーキョの3つの湖の奥にひっそりと立つ、エベレスト見晴台といった感じの山であるが、チョー・ユウ (8153m) も見ることができる。山に入ってから9日目でやっとゴーキョ・ピークに立った。なぜかエベレストが5年前に比べて小さい。始めて見たときのあの感激がない。やはり2度目になると変な馴れというものが出てしまうのか。少し思い当たることがある。私の部屋には5



写真 12 ゴーキョ・ピーク(中央)とチョー・ユウ

年前に写したゴークョからのエベレストをA3にプリントした写真が飾ってある。パソコンの背景画面にも長らく同じ写真を使っていた。これらはズームで捕えて、さらに写真加工ソフトを使ってトリミングしたものである。これを毎日眺めているうちに、ゴークョの頂上からはこんな風にエベレストが見えたと、勝手に思い違いをしていたのではないか。エベレストにしてみればいい迷惑かもしれない。なんだかエベレストの雪の量まで少ないように感じてしまう。



写真13 エベレストに見下ろされたゴークョ・ピーク頂上でご機嫌の金沢さん

トレッキングとは、その地域に住む人たちの生活道を歩くという意味であるので、前日までのゴークョのテントサイトへ着くまではそれほど厳しい登り降りにはなかった。しかしゴークョ・ピークは山であるので、それなりの傾斜があり遅れ気味に登る人も出てきた。私のテント相部屋の戸塚さんもかなりばてていた。彼はゴークョ登頂の前日に、“目的はカラパタールで、ゴークョはついでですよ。”などと話していたので、ゴークョからしっぺ返しを食らった。ヒマラヤでは高山病になるとすぐヘリコプタで降ろされてしまい、今回もヘリコプタで降ろされる光景がよく見られたので、彼はいつぱんに消極的になってしまって、“ゴークョ・ピークだけ登りにきたグループと一緒に帰ろうかな。”とまで言い出してしまった。私のように若いころからいつもばてて、“それでも男か！”などと言われて、ケツをたたかれながら山をやってきた人間から見れば、たかが一回ばてたくらいでとしか映らない。そのようなことを言ってやると、少しは気を取り直したようである。カラパタールへ移動するために、一旦ポルツェタンガまで戻る。戸塚さんも元気を取り戻して、歩いている最中も饒舌になってきた。元気を取り戻すのはけっこうなことであるが、“次はバルトロ氷河へ行く”だとか、職業のタクシー運転手としてみた客の話などを良くしゃべる。トレッキングの楽しみ方とは「今そここの大自然の中に居ることを喜びとするべきである。」と悟りを開いた私としては非常に耳障りである。夕食後の団欒のときならともかく、昼日中のヒマラヤの山の中で聞く話ではない。



写真14 高山病患者を降ろすヘリコプタ

高山病にかからないためには、たくさん水を飲んでおしっこをたくさんすることによって代謝機能を高める、ということは今回も守った。したがって夜中には何回もシュラフから出ておしっこをすることになる。私はこのことをぜんぜん苦にしていない。むしろ満天に輝く星を見ることに喜びさえ覚える。しかし今回はどうしたことか、満天の星がみんな小さい。大粒の星たちが

こっちへおいでと呼びかけてくれるのが、寒空の中へ出て行っても苦にならない理由なのに何たることか。「地球温暖化？」関係ないよ。今年行ったペルー・アンデスだって、カムチャッカだってきれいに輝いていたよ。

7. ポルツェの寺院と部落

ポルツェタンガに着くと一日休養日ということになった。ポルツェタンガは3 550mであり、久しぶりに4 000m以下に来たので休養日ということらしい。しかし今回の行程は毎日4時間くらいの半日行程である。しかも荷物はポーターが持ってくれるし、食事もテント張りも全部やってもらえるし、その上歩き方は高山病対策でビスターリ（ネパール語でゆっくりの意）である。毎日が休養日みたいなもんだ。“希望者は近くのポルツェ部落にラマ教の寺院見物に行ってください。”、ということなので当然行く。希望者は長岡さんと愛知さんに私であった。カルマの粋な計らいで、ポルツェ部落出身のプルテンバとギャルゼンが案内してくれた。部落の取っ付きまでが30分、さらに寺院まで30分という行程である。プルテンバが先頭でわれわれを挟んでギャルゼンがラストを務める。部落が近くなったところでギャルゼンが先頭のプルテンバのところへ行って何か話していたが、どんどん先へ行っていなくなってしまった。ティーンエージャーと思えるギャルゼンはお母さんが恋しくなって家へ帰ったのかなと思う。寺院に着いて門の中へ入ると鍵がかかっている。けっこう由緒ありそうな寺院であるので、“まあしょうがないや。”と思っていると、息を切らしたギャルゼンが鍵を持ってきてくれた。説明者らしい英語が話せるジイサマも連れてきている。ギャルゼンはサボって家へ帰ってしまうなんていう不真面目者ではなかった。自分がいいかげんだからといって他人まで同じに扱ってはいけない。ギャルゼンに対して恥ずかしかった。ジイサマが寺の内部を説明してくれる。ホルンやフルートに似た笛類や太鼓などもある。たくさんのお経を入れた棚があり、祭壇の右と左で汚れ方が違う。それらの理由なども説明してくれる。寺院内部の記念写真なども快く撮らしてくれたが、ジイサマ自身は決して写真に納まろうとはしない。流暢な英語も話せるので迷信



写真 15 ポルツェの寺院の内部



写真 16 カンテガ (左) とタムセルク(右)に見下ろされたポルツェの部落

を信じるようなタイプではないと思えるのであるが。

ポルツェの部落はカンテガ（6 783m：馬の鞍の意味で、まさにその形をしている）とタムセルク（6 341m）に見下ろされたのどかな部落である。この地域にしては珍しく畑作地帯である。

プルテンバが自分の家へ案内してくれた。2階建ての4軒長屋である。一階は入り口とまきなどの物置で、2階が住まいである。奥さんがかまどに向かってお茶を沸かしている。3・4歳の腕白坊主ゼンとした男の子と1歳前の赤ん坊が全家族である。プルテンバはエベレストにも登ったことがあるという強者で、ヤクを追い立てる姿などはけっこうおっかなく見えるが、子供を抱くとすっきり良いお父さんになる。こんなこともあるのではないかと予想されたので、「みずず飴」や「こんにやく畑」などのお菓子をよけいに持ってきていたので坊やにあげた。腕白坊主はけっこう良い子で、お父さんの許しをもらってから受け取った。シェルパの家庭を案内してもらったのは始めてである。



写真 17 プルテンバの家族と

8. カラパタルへの移動

カラパタルへの移動中に事件は突然起こった。アマダブラムを双眼鏡で覗いていた誰かが叫んだ。“オ、登っているのがあるぞ。”、アマダブラム上部の絶壁に黒い点のようなものが取り付いている。みんながそちらに見入った。しばらく見ていたがいつまでもそうしているわけにも行かないので、行動再開ということになった。サーダーが気づいた。“一人いない”、愛知さんの姿がいつの間にか消えている。さっきまで一緒に休んでいたのに、みんなの注意がアマダブラムに集中して



写真 18 アマダブラムの絶壁

いる間にいなくなってしまう。彼女は角膜を痛めているとのことでほこりを極端に嫌い、歩くときもみんなとは離れて歩いたり、休むときも一人離れて休んでいることが多かった。しかしこのときにはそばで休んでいたのを私も確認していた。ペルー・アンデスのときも一番後ろを歩いていたのが、いきなり一番前まで行ってしまったりしておかしな歩き方をしていたが、今回は前後だけでなく左右も独自のルートを探って、周りもそれに慣れてしまっていた。それにしてもいなくなるというのは尋常ではない。サーダーは前方に目を据えて先に行った。後のメンバーはとり

あえず前へと進んだ。もしかしたら後ろにいるのかもしれないと、みんな心配しながら自信無げに歩を進めた。しばらくすると先頭のプルテンバが“あそこ”と指差した。はるか前を歩いている。サーダーが必死に追いかけている。島方さんが大声で呼ぶが見向きもしないで先に行く。ようやく追いついて島方さんが何か注意をしている。カンカンになって怒るのかと思ったら、案外穏やかに話している。彼女もそれからは島方さんの後ろを歩くようになってひとまず納まった。一番後ろを歩いていた私のところにサーダーが来て、“何を怒っているのだから分からない。”と嘆き顔で言った。彼女はみんなから孤立していて、親しく話すのは中蒲原弟とペルー友達の私くらいであった。ペルーのときの彼女は、バスで移動中に気分を悪くした 70 歳過ぎの男の人に対して献身的な介護をして回復させたことがあった。そのとき居た周りのみんなが“あの人は元看護婦だったんだって”と言っていたので、私は真に受けていた。しかし今回の彼女はわがままなところが目立って、患者に対しても医者に対しても“従”の立場が要求される「看護婦」とはとても思えない。“愛知さんは元看護婦ではなくて医者だろう”と聞いてみたら、“そんなに詮索しないでよ”と軽くいなされてしまった。こういう事件を起こした後ではなんと声をかけていいのか困惑してしまうところであるが、その次の休みのときに“みんな心配したぞ”と声をかけると、“だって、サーダーがみんなのところへ行って一緒に歩けって、シッシッてかっこするから切れちゃったのよ。”という。“でも一番最初にはないことに気がついて一番心配していたのはサーダーだよ。”と私が診たまの感想を言った。

高山病対策として、泊まる場所よりも 100m でもいいから一旦高いところに登っておくと良いというのがある。その意味もあってよく夕方になると夕焼けの写真を撮るために裏山に登った。いつも長岡さんと愛知さんが一緒だった。長岡さんは写真大好き人間である。けっこう本格的なカメラを持ってきている。(私は写真に詳しくないのでその価値は判断できない)山の写真とその他の写真ではカメラを使い分けていて、別にデジカメも持っている。夕焼けに赤く輝くヌプツェやローツェなどを好んで撮っていた。三脚も持ってきていたが、買ったばかりで使い方がわからず私に聞いていたくらいであるから、腕のほうほどの程度かわからない。しかしファインダーを覗くときの彼女の顔は、本当に山が好きでカメラが好きなんだなという雰囲気が漂う。家へ帰ってからアルバムに見入っている姿が目につく。山を夕焼けに染める太陽は長岡さんにも注ぎ、その頬には 66 歳の彼女に一瞬少女の輝きを走らせる。



写真 19 夕焼けのローツェ

9. カラパタール

今回の 5 000m 峰 3 つのうちでも最高峰のカラパタール (5 545m) への登り口のロブツェに着いた。着いてすぐに昼飯になったが、ここのダイニングはえらく汚い。明日のカラパタール登頂

後もここに泊まるわけであるので、こんなところに2日間も厄介になるのはうんざりする。山では与えられた条件はすべて甘受するべきであると考える私にしてもちょっと文句を言いたくなる。周りにはほかにきれいなロッジはたくさんあるのだ。長居は無用とメシを食い終わると真っ先にロッジを出でテントへ向かった。途中サーダーに会う。“メシは美味かったか？”と聞くので、“Lunch is good, but that lodge is very bad.”と言うと、彼はすぐにそれを認めて“My mistake.”と言った。テントに入ってしばらくしてから外へ出ると、ちょうど顔を合わせた島方さんから“ロッジはあっちのきれいなほうに代わりました。”と告げられた。おそらく普段は文句を言わない私から文句を言われたことをサーダーから聞いたのであろう。商魂たくましいサーダーが利益を増やすために最初は汚いロッジを使おうとしたのか知らない。しかしそんなくだらない詮索をするよりも、サーダーがわれわれの快い山登りを願ってきれいなロッジを世話してくれたと解釈することにしよう。「ここはヒマラヤ、空は限りなく青いのだ」

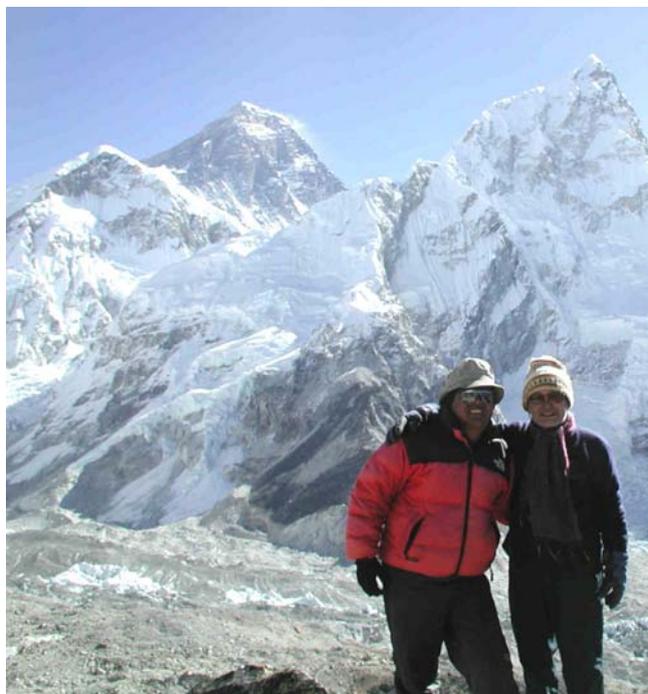


写真 20 カラパタール頂上でサーダーと

カラパタールへの基地としては、ロブチェの先にゴラクシェップというところにもロッジがある。しかし島方さんは5170mのゴラクシェップに泊まるよりも4930mのロブチェに泊まって、高山病にかかるリスクを避けた。そのため登頂日のこの日は10時間行程という、今回の楽々トレッキングの中では長時間行程になった。朝は4時からヘッドランプによる歩行である。2時間も歩かないうちに南さんが体調不良のためのリタイアを申し出る。前夜の食事もほとんど食べていなかった。それでもおしゃべりな彼女はよくしゃべっていたが、やはり山登りに空腹は敵である。行程は長かったがカラパタールへの登りはゴーキョよりも楽であった。戸塚さんも今度は元気いっぱいである。ゴーキョのときはよけいな荷物を持ちすぎだったみたいだ。中蒲原弟さんは写真を撮るのに大忙しである。“自分は山登りなんてどうでもいい。写真をとるための手段として山に登るんです。”などと公言しているくらいであるので、ここは張り切りがいのあるところなのであろう。“そんなに動き回ったら頂上に着く前にばてちゃうぞ”とお兄さんから注意を受けても聞く耳を持たない。中蒲原弟さんは元国鉄マンで今は300坪の畑を耕すが、自分が食べる分だけ作るということなので百姓というわけではない。その畑の中にステレオハウスを建てて、ご近所迷惑にならないようにそこでガンガン趣味の音楽を聴くのだという。愛知さんの旦那も同じ趣味を持つということで、40年前はラジオ少年であった私にもわからないスピーカーのメーカー名を挙げたりしてステレオ談義に熱中したりしている。中蒲原兄さんのほうも今は同じく200坪の畑を耕すという。毎日2000m泳ぐということで、この程度のトレッキングでは息ひとつ切らさない。見かけもとても69歳には見えな

い。ただ前立腺に障害があるということで、昼も夜もよく小便へ行く。老いるということはどこかに不都合なところをもたらしてしまうということは避けられないようだ。

ちょっと気に入らないことがあった。カラパタールには北峰と南峰の二つのピークがある。島方さんは南峰を選んだ。“こっちのほう山頂が広いし、エベレストを見るにはこっちのほうがいい”と前夜説明された。ピークに立ってみると北峰のほうが高そうである。鈴木隊も含めてほかのパーティーはみんな北峰へ登っている。私は単純な人間だからやっぱり高いところのほうがいい。この島方さんの選択には不満が残った。“俺だけでも北峰も登らせてくれないか”と言おうとも思った。今回は調子がいいのでそれくらいのことをやっても、帰るまでにはみんなに追いつけるという自信もあった。でもそういった勝手な行動は慎んだ。その分不満は大きくなった。

カラパタールから見るエベレストはゴークョからのそれより少し落ちると私は感じた。隣のヌプツェ(7864m)のほうが近さの関係上高く見えてしまうのだ。やっぱりエベレストには世界一でいてもらわないと困るのだ。

これで3つのうち2つ目も終わった。ゴラクシェップのロッジで昼食をとった時もなんとなく安堵感を感じた。まだチュクンがあるのだが、一仕事終わったと思ってしまう。

ロブチェへ帰り着くとテントの中で改めて地図を見た。カラパタールの北峰と南峰の高さの違いを確認しようと思ったのだ。しかしそんなことは無駄であることがすぐにわかった。北も南もない。そもそもカラパタールなんてソフトアイスクリームのような形をしたプモリ(7165m)の支脈の一部に過ぎない。谷川岳や尾瀬の燧ヶ岳のように双耳峰というわけではない。そんなものにこだわってしょうがないじゃあないか。みんなが北峰へ登っていたから自分もそうする



写真 21 プモリをバックに長岡さん・愛知さんと

べきだなんていう発想は、馬鹿な女の子が「ルイ・ビトン」だとか「ピエール・カルダン」だとかブランド物にこだわるのと同じじゃあないか。山での先輩としての島方さんが言う“こっちのほうが広いし、エベレストを見るにはこっちのほうがいい”という言葉信じよう。北峰のほうが狭いし人がいっぱいいたから写真を撮るにしたって大変だったろうし、ちょうど逆光になる時間であったのでその面でも南峰のほうが有利であった。島方さんの判断は正しかったのだ。「ここはヒマラヤ、空は限りなく青いのだ」

10. チュクン

ゴークョとカラパタール間の移動には6日間を要したが、カラパタールとチュクン間は3日で移動した。

また別の騒動が起きた。夜中に中蒲原さんのテントで長い間話し声が聞こえる。誰か病気にでもなったのかと心配したが、翌朝聞いてみるとシュラフのファスナーが閉まらなくなって夜中に

ロッジに移動したのだという。さらに二日くらい後の夜も中蒲原さんのテントから話し声が聞こえる。またまたシュラフとテントのファスナーが閉まらなくなってロッジに移動したという。翌朝、中蒲原弟さんはかなり怒って、“直したといったがぜんぜん直っていないじゃないか”と島方さんやサーダーに当たっていた。確かにこのテントのファスナーはよくはじけた。私のテントもファスナーを下ろしても切腹してしまうことがよく



写真 22 ロッジ脇に張られたテント

あった。私はこういうときには気長なほうだから、夜中の小便から戻ったときには5分くらいかけても丹念に直した。同じテントの戸塚さんはそうも行かないようで、最初のうちは彼が出た後はファスナーが切腹していることが多かった。しかしそのうち彼もコツを覚えたようでわれわれのテントの場合は収まった。中蒲原弟さんの怒りはさらにエスカレートして“だいたいメシにしたってろくなもん食わせないじゃないか。野菜ばかりで、少しは肉を食わしてもらわないとパワーが付かないじゃあないか”と言いだした。ここまで言いだすと私の彼に対する評価が変わった。ファスナーのときは、彼の言い分が95%くらい正しいと思った。だがメシの話まで聞くと、シェルパたちの味方になってしまった。いったいわれわれはなぜ山登りなんかを行うのか。山である限りは人間よりもデカイわけである。そのデカイ山へ登るためには、人間は自分の足で誰の助けも受けずに歩かなければいけない。荷物も自分で持たなければいけない。食事も自分で作らなければいけない。これが原則である。原則だけ言ってたら大変であるので、山小屋の助けを借りたり、さらにここヒマラヤではシェルパやポーターが手助けしてくれるシステムが出来上がっている。だからこそ人間は心だけは原則に戻って、山では常に謙虚でなければいけない。山登りには「自分の権利の主張」などという言葉は似合わないのである。シェルパたちには感謝をすることはあっても、これだけの金を払ったのだからこれだけのことをしてもらおう権利があるなんていう理屈は成立しない。そんな理屈をこねたいならば、家で寝ころがってハナクソでもほじってればいい。

チュクンの登りでも南さんはまたリタイアした。前夜はカラパタールのときよりは食べているように思ったが、肉は受け付ないだとかアレルギーがあるからだめだとか言って、やはり食は細かった。“山ではメシはクソの元と思うようにならなければだめだよ。形も硬さも理想的なクソをするために食うのであって、舌触りだの咽ごしだのと言っているようでは山では通用しないよ。”とアドバイスをしてあげたが冗談としか受け取らなかったようである。長岡さんと二人で何とかしようと引っ張ったが、まだ山登りとはいえないような傾斜のゆるいところでダウンしてしまった。俺なんかが行こうか行くまいかビビっているモンブランにも登ったことがあるというので、短期間であればこれでも何とかできるのであろうが、28日間の長丁場には向かない。それでもまだおしゃべりである。わが同室の戸塚氏の評では、“普段猫としかしゃべらないから、人と一緒にいるときはやたらしゃべりたいんだよ。”となる。彼女は旦那に死別して、息子は二人とも独立して、

この4月からは仕事からも離れ、猫との二人暮らしという。

カラパタルで気が抜けてしまったのでチュクン (5 404m) は意外に歯ごたえを感じた。チュクンの山頂に立ってみるとエベレストが見えない。この日は鈴木隊と頂上で一緒になったので、鈴木さんに聞いてみる。「エベレスト 3 大展望ピーク」と謳った旅行社のタイトルにうそがあると中蒲原弟さんと一緒に迫った。彼は手帳を取り出して旅行案内のコピーを調べてからわれわれにタイトルの部分を指差して、“「エベレスト山群 3 大展望ピーク登頂」と書いてあります。「山群」が入っているからタイトルにうそはありません。”と答えた。おぬしなかなかやるな。「ここはヒマラヤ、空は限りなく青いのだ」

ネプツェという山はナムチェ辺りから見るとエベレストの前にカーテン状に横長にそびえていて、エベレストの全貌を見ることを妨げている。ここチュクンではもろにこれがエベレスト展望の障壁になっている。ナムチェやカラパタルから見ているときはヌプツェという山は邪魔な存在としか思わなかった。しかしここで堂々と自己主張している姿をみると、やはりヒマラヤの 8 000m に近い山である。その味わいはジュックリと迫ってくる。カラパタルからではカーテンを側面から見るような角度であったが、チュクンからはカーテンの全容を見ることになる。こんなに横長で高さのそろった山塊は見たことがない。

今回のシェルパは若い人が多い。サーダーのオングチョップ (51 歳) とコック長のカルマ (49 歳) はそれなりの歳だが、その下はプルテンバ (30 歳) ・カイラス (20 歳) ・ロハス (19 歳) と続きギャルゼン以下はもっと若そうだ。今まで見てきたグループは、ガイドは道案内のみを行い、キッチンボーイは食事製作担当と食事関係の荷物運び、ヤク使いはヤクの追い回し、ポーターはテントや客の荷物運びと役回りが決まっていた。今回はプルテンバやカイラスのガイドがヤクの追い回しまでやっているし、食事時に客へのお代わり担当までやっていて、いわば多能工である。シェルパが所属する会社の方針がそうなのか、サーダーの方針なのかかわからない。時代によってやり方も変わってくるのかもしれない。



写真 23 ヌプツェ(左)とローツェ (右)



写真 24 チュクン頂上で若いシェルパたちと

チュクンから下りてお茶の時間になると、金沢さんが抹茶を立ててくれて羊羹まで付いている。金沢さんは容姿と中身ともに肝っ玉母さんといった感じである。今は記憶方法に特徴のある学習塾の先生をやっているということであるが、学生時代はワンダーフォーゲル部ということで、ご主人ともそこで知り合って子育ても卒業したということだ。その割には今回の最年少で 56 歳である。3 つのピークを終わったタイミングでお茶と羊羹ということになったのであろうが、とにかく金沢さんはタイミングがいい。口数は多いほうではないが、たまにしゃべることがすごく気が利いていたり面白かったりする。中蒲原弟さんはこれを評して“金沢さんはパルスのような人だ。”と言った。忘れたころにしゃべる一言がポンと突き出ている。

1 1. 星が小さい

なぜ今回のヒマラヤではこんなに星が小さいのだ。終盤になってからは満月になってしまったから仕方がないが、最初から全体に小さい。ゴーキョから見たエベレストが 2 度目という関係から迫力を感じなくなってしまったのと同様な感情的なものか。そんなことはない。こと星に関してはキリマンジャロでもペルーでも過去のヒマラヤでも、常に俺の心を幸せに導いてくれていた。

ゴッホの「夜のカフェテラス」という絵がいけないのだろうか。あの絵の星は大粒過ぎる。あんなのを見てしまったから実際の星が小さく思えてしまうのだろうか。大体あの絵は何なんだ。カフェテラスの明かりがこうと照っていたら、星があんなに見えるはずがない。周りが暗いほど星は大きく良く見えるのだ。ゴッホは想像の中で、かつて別々に見たカフェテラスと星を合成して、それをカンヴァスに描いたのに違いない。そういえば星を描いた絵というものがほとんどない。その昔週刊新潮の表紙を飾った谷内六郎の絵には、子供が夕方まで遊んでいるというシチュエーションで時たまあったように思うが。星の絵が少ないのは絵の具屋の陰謀だ。黒の絵の具しか売れなくなっちゃうのは困るのだ。変なところに八つ当たりしたくなる。

1 2. マニリンドウ

タンボチェはナムチェから 4 時間ほどのところに位置している。ナムチェがこの地域の商業の中心地とすると、タンボチェには由緒ありそうな古い寺院があり文化の中心とでもいえそうである。満月の翌日にはマニリンドウというお祭りが行われる。運良くわれわれが行ったときその日に当たった。“見たい方は午前中マニリンドウを見て午後からナムチ



絵 1 ゴッホの「夜のカフェテラス」



写真 25 タンボチェの寺院

エへ移動します。見ない方は朝からナムチェへ行きます。”といわれた。“見ていきます”と言ったのは、長岡さんと私に金沢さんだった。寺院の中には中央広場の周りに敷席が2層構造で設えてあり、観客はその敷席に陣取り、広場でホルンのような笛を吹く人や



写真 26 マニリンドウ

お面をかぶった人たちが踊るのを見る。けっこう派手なお祭りだ。2階席にはわれわれなどの外人さんが多く見物しており、1階席に本来は主賓の地元の人が見物している。われわれ外人さんは500ルピー（日本円で700円くらい）取られるが、地元の人はずっとみたいである。シンバルのようなものをたたく人がたくさん出てきて、けっこういい身体をしているところを見ると、見掛けより重労働であることが想像される。派手なお面をかぶった人たちが単調な踊りを繰り返す。長岡さんと金沢さんは自慢の高級カメラで、この様子を写しまくる。マニリンドウは午後まで続いたようであるが、われわれは午前中で引き上げた。

9. トレッキングにおける付き合い

私もすでにリタイアの身であるので組織というものとは無関係になっている。一般にトレッキング仲間というものはそのときだけのテンポラリーな付き合いで、終わればさよならである。しかし今回のような28日間の長きに渡るトレッキングでは一緒にいる人たちとは組織を組んだような気になって、周りの人のことにも注意が及ぶ。だから相手に対して気に食わなかったところも意識して本人に話した。そのようなことを話さないで別れてしまうことは、その人に対していやな一面を持ったやつだという思いを残したままになってしまうことを避けるためである。



写真 27 一列縦隊歩行

わが同室の戸塚さんとも一月近くも付き合いと変人には見えなくなる。昨年と比べると、テレビも買ったらしいし新聞も付き合いで取らされたといっているの、ずいぶん並になってきた。私は、夜は横になればすぐに寝てしまうほうであり、朝はモーニングティーで起こされるまでは

目が覚めていても起きないので、ほとんどテントでは話すことがなかった。彼はけっこう自分流を押し付ける一面もあるので、それを警戒したということもある。もっとも他人から見れば私も十分変人であるだろうから人のことをとやかくは言えないが。お茶にはかなりうるさく、昨年と同様に高価なお茶を持ってきて食後にはみんなにふるまっていた。彼のほうは私のことを山の大先輩と思っているらしく、私の要求には決して異論を唱えなかった。最初の夜に腕時計の時報やアラームの音を鳴らされた時にはこの先どうなるかと思ったが、別に他意があったわけではなく、最後のほうでは私的な話もするようになった。だから昼日中のトレッキングの最中に、タクシー運転手としてみた客の話などは、私としては耳障りだったよということも話した。

愛知さんは何をやってもこなしてしまうみたいだ。広大な丘状のところをトレッキングしているときに、中蒲原弟さんが“パラグライダーに最適だね、もしかして愛知さんやるんじゃないの？”と聞いたら、あっさりと“やるよ、身体障害者の人にボランティアでパラグライダーに乗せてやったら喜ばれたよ。”なんて話していたくらいであるから半端ではないようだ。今回のわがまま愛知さんを見ると信じられないが、私は彼女のペルーでの老人介護実演を見ているので、素直に信じられる。川の荒い流れに出会ったときにカヌーの話が出たらこのときも“私、カヤックやるよ。スジが良いってほめられたよ。”といていた。車は亭主が外車の何とかで、自分はセンチュリーで娘が何とかとか言っている。お茶はナントカ流とナントカ流をやっていて、お花はナントカ流ということで、家には茶室もあるという。自己流ではあるがお茶をやっていて、茶室を持ちたいと思っているという中蒲原弟さんと茶室談義に話を弾ませている。“へー、お茶やお花の極意を習得してもわがままは治らないのか。”とまぜっかえしてやったが、意にも介さないで話を続けていた。おまけにパソコンはメーカー品ではなく自作品を使いこなしているという。私はこのような彼女のことを密にアメリカ映画の「ワンダーウーマン」から連想して「ワンダーミドル」というあだ名を付けていた。自分意識の強い彼女はどうせ理解しないであろうとは思っていたが、“山では「自分の権利の主張」などということはするべきではないよ。”と話したが、やっぱり反発された。だから「ワ



写真 28 モーニングティーを配るカルマ



写真 29 ヤクの荷物運び



写真 30 ポーターの荷物運び

ンダーミドル」は「ハネッ返りミドル」に格下げした。トレッキングの最後にルクラに着いてみやげ物屋探索をしているときに、やはり一人でみやげ物屋探索をしている彼女に出会った。ルクラ飛行場へ誘って斜めの滑走路を見せた後で、帰り道をぶらぶら歩いている時に、シェルパたちがテントを洗って干している光景に出会った。近づいてみるとわれわれのシェルパたちであった。プルテンバがいる。ロハスがいる。カイラスがいる。みんなもう次のトレッキングのために準備をしているのである。愛知さんのお気に入りであるロハスがシュラフのインナーを足で踏み洗いしている。高所の冷たい水は彼の足をふやけさせ、水に濡れた部分は白く変色している。それでも彼はそんなことはものともせず踏み続ける。私が飽きてしまって帰ろうとしても彼女は見続けていた。洗い場から通りへ出ると、別の3人の女性たちに出会った。私は彼女たちにも見せてやろうとまた洗い場へ引き返した。やはり鮮烈な印象を残したようで、その日の午後のお茶の時間に彼女たちから“あの人も大変なんだね”という話が出た。そのときあの「ハネッ返りミドル」が、“あんたの言うこと解ったよ”という感じで、私に向かって大きくうなずいてみせた。



写真 31 洗濯をするシェルパたち

中蒲原弟さんにも「自分の権利の主張」というのは山では似合わないよと話した。シラフのときに話したかったが、その勇気が出ず最後の晩の酒の席になってしまった。“高橋さんは山男だからそういうことを言いますが、私は写真を撮るのが目的で山はついでだから”と言ってきた。しかしそれはない。5000mを越える山に3つも登って、ヒマラヤで28日間も過ごし、なによりもあの「限りなく青い空の下」を経験したのである。それでもわからないというほど鈍感ではないはずだ。この地域には2度目の私が山の名前はエベレストとアマダブラムしか覚えていないのに、熱心にメモを取ったりスケッチまでしてタムセルクやコンデ・リなどを覚えて、私に教えてくれた。もはや立派な山男である。

ところで私が人に対してそんなにえらそうなことが言えるのかな。今回見たトレッカーの中には、日本人でも外人でも大きな荷物を持って一人で歩いていたやつがいた。シェルパに頼って歩いているようでは50歩100歩である。でもそうしたらシェルパたちの生活が成り立たなくなるので、2回に1回は一人で歩くということができたらいいなかな。そんな度胸ないだろうけど。こんなことを言っているようでは、いくら年を取っても俺もまだ青いな。いや育っていないだけなのかな。

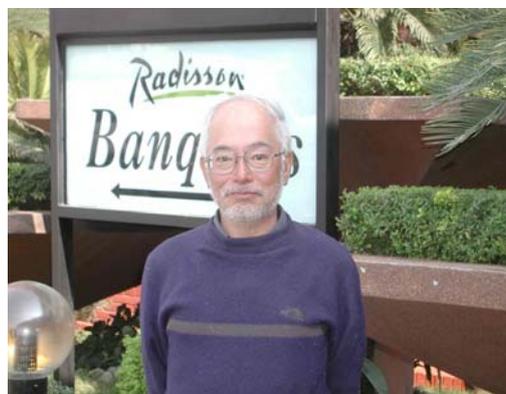


写真 32 22日間のひげ